

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K13208

研究課題名（和文）セルフモニタリングと援助希求に着目した、こころの健康教育プログラム作成と効果検証

研究課題名（英文）Creating and verifying the effect of a mental health education program focusing on self-monitoring and help-seeking

研究代表者

金田 渉 (Kanata, Sho)

帝京大学・医学部・講師

研究者番号：30778353

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：セルフモニタリングや援助希求に注目した、こころの健康教育プログラム教材を作成した。教材は無償公開し、実際に高校での授業経験を蓄積した。新型コロナ禍により、計画していた教育プログラムの効果検証に至らなかった点は本研究の限界である。新型コロナ禍により研究計画の変更を余儀なくされたが、これを受けてパーソナル・リカバリー、ピア・サポート、ヤングケアラーなど、精神医学から学校精神保健に援用し得る概念を見出した。地域代表性の高い大規模疫学データを用いて、思春期の若者の精神的不調に関連する諸要因を明らかにした。また、精神科相談医の立場から、精神的不調の発見や受療実現に貢献し、学校精神保健の増進に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、AYA期（思春期および若年成人期）のこころの健康教育に焦点を当てた点にある。精神疾患の発症が多くみられる思春期において、学校現場での教育プログラムを通じてセルフモニタリングや援助希求のスキルを育むことを目指す。これにより、従来の病院中心の精神科医療が対応しきれなかった精神的不調に対して、学校を中心とした予防・早期発見のアプローチを取り、精神保健教育の充実、こころの健康増進に寄与することができる。教育教材をすべて無償公開した点も社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：Mental health education program materials focusing on self-monitoring and help-seeking were developed. The teaching materials were made available free of charge, and teaching experience in high schools was accumulated. A limitation of the study is that the effectiveness of the planned education program could not be verified due to the COVID-19 pandemic. The COVID-19 pandemic forced a change in the research plan, but this led to the discovery of concepts such as personal recovery, peer support, and young carers, which can be applied from clinical psychiatry to school mental health. Using large-scale epidemiological data with high community representation, we identified various factors related to mental ill-health among adolescents. Psychiatric consultation at high schools contributed to the early detection of mental illness, which led to the promotion of school mental health.

研究分野：精神医学

キーワード：学校精神保健 思春期 メンタルヘルス 精神保健 精神医学 アウトリーチ 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

思春期のこころの健康は、成人してからの健康を基礎づける重要テーマである (Sawyer et al, *Lancet*, 2012)。本研究期間中にも思春期への注目はより高まり、とりわけ発達疫学の知見が蓄積されるなかで、AYA 期 (Adolescent and Young Adult) としてより精緻に概念化されてきた。AYA 期にヒトは、第二性徴を起点として脳神経系の構造や機能を成熟させる。抽象的な思考能力やメタ認知機能の獲得を基盤としながら、心理的に大きな成長を遂げる。生活の中心を家庭から学校などのコミュニティへと移行させ、社会的役割の獲得を準備する。AYA 期は「子どもから大人へ」という、人生の一大転換期と言える (金田ら, *精神医学*, 2022)。AYA 期の主要な健康問題として、精神的不調が挙げられる。精神疾患は生涯での罹患率が約 20% ときわめて高く、かつその約 7 割が思春期に初発するため、先進国の若者に最大の損失を与えている (Gore et al, *Lancet*, 2011)。たとえば本邦において、AYA 期の若者の死因 1 位が他ならぬ自殺であることは、看過しえぬ社会問題である。AYA 期の精神的不調の予防あるいは早期発見は、精神保健上の重要課題のひとつでありながら、効果的な対策へのエビデンス構築は不十分である。

精神的不調の予防・早期発見のために、学校での教育プログラムが注目を集めている。学校は AYA 期の若者たちが社会生活をおくる中心的な場であり、適切な教育が実施されることでこころの健康の増進に加えて、精神的不調の早期発見や、すみやかな受療促進が期待される。精神医学の領域においても、学校への出張 (= アウトリーチ) を一層充実させるべきという指摘が盛んである (金田ら, *精神医学*, 2022)。AYA 期の若者の多くは、精神的不調を抱えていたとしても、精神保健の専門職に相談しようとしにくい。その要因はさまざまに指摘されてきたが、ひとつには、自身のこころの不調にみずから気付く能力 (= セルフモニタリング) や、適切な相談先を見つけて援助を求める能力 (= 援助希求) の不足が一因とされる。

こころの健康に関する教育は、上記の関心の高まりとは裏腹に、いまだ十分とは言い難い。国外では英国の自殺予防プログラム (Wasserman et al, *Lancet*, 2015) や、豪国での包括的な学校精神保健活動 "MindMatters" などが参考になる。国内でも学校精神保健プロジェクト (東京大学: 佐々木司)、包括的学校危機対応準備モデル (名古屋大学: 窪田由紀) など先駆的な取り組みが存在する。とはいえ、どのような教育内容や方法が有効なのかは、依然として明らかではない。本邦の学校教育は、本研究開始時に障害者差別解消法の制定や自殺対策基本法の改訂により、こころの健康教育の拡充が学校に求められていた。また高等学校の新学習指導要領において、精神疾患についての内容が大幅に拡充されようとしていた。しかし、具体的な教育プログラムは提示されておらず、特に現場の教諭らが何をどう指導すべきか苦慮していた。

研究代表者は精神科医のバックグラウンドを持ち、精神科の専門外来で AYA 期の若者たちの精神的不調への臨床経験を蓄積してきた。さらに、AYA 期に最好発する精神疾患である統合失調症のリカバリー・ガイドライン策定研究で、分担研究者を務めた (AMED「当事者との共同創造 co-production による実践ガイドライン策定」)。学校との関わりは、2012 年から現在に至るまで、東京都教育庁の委託で行う都立高校への精神科医派遣・精神保健相談事業を担当し、学校へのアウトリーチ活動を継続してきた。学術的なバックグラウンドとして、地域住民代表サンプルによる  $N = 3,000$  人超規模のコホート調査 (東京ティーンコホート: <http://ttcp.umin.jp/>) に、ベースライン調査 ( $N = 4,500$ ) の計画段階から一貫して参加してきた。本コホートのデータから、若者のこころの健康発達、精神的不調に関わる因子についての研究を継続してきた。

## 2. 研究目的

**研究目的の概要** 本研究開始時点での目的は、①文献的精査や有識者会議を経て「こころの健康教育プログラム」を作成し、②学校現場で AYA 期の若者 (特にこころの健康問題が急増する高校生) を対象に実施することであった。さらに、③教育プログラムによって、生徒の行動やセルフモニタリング・援助希求が変容するか検証を試みることも目的とした。なお、研究期間中に生じた社会的事情に鑑み、研究の目的や方法は修正を余儀なくされることとなった。この点については、次頁「研究目的の変更」で詳述する。

**本研究の特色** 精神疾患を主対象とし、病院を中心に実施される従来の精神科医療は、受療に至りにくい診断閾値下の精神的不調に対応しきれていなかった。学校への出張 (= アウトリーチ) を行い、その効果を実証しようとする点は、本研究のひとつの特色である。

また、学校現場で重視されてきた「ゲートキーパー (教諭) による早期発見」という方法論は、教諭がこころの健康問題への専門的なトレーニングを受けておらず、また生徒自身もセルフモニタリングや援助希求のスキルを十分に持たないため、必ずしも十分な効果が得られていなかった (Evans et al, *J Adolesc Health*,

2005)。本研究は、生徒自身への教育プログラムにより、セルフモニタリング・援助希求という生徒の認知行動的な能力を涵養することで、効果的かつ持続的なこころの健康増進を計る点にも特色を持つ。

**本研究の意義** 上述の目的に加えて、本研究の成果は生徒・学校・社会に効果を波及し得ると考えられた。

①セルフモニタリングや援助希求という、こころの健康を維持するのに欠かせない能力(=レジリエンス)を生徒自身が獲得できる。②授業の提供自体ではなく、学校レベルで実施可能な教育プログラム作成を目的とするため、こころの健康問題を学校自身が解決する能力を醸成できる。③主体的なプログラム実施のなかで、学校環境そのもののこころの健康への意識が向上することも期待される。作成された教育プログラムや教材を無償で公開・配布することで、広く全国に研究成果を共有できることも研究成果の社会還元となる

**研究目的の変更** 当初の研究計画では、高校における「セルフモニタリングと援助希求」について授業を実施し、効果検証のためのデータ(N=1,000程度を想定)を収集する予定であった。しかし、2018年度末からの新型コロナウイルス感染症(COVID-19)がもたらしたパンデミック(以下、新型コロナ禍)により、本研究の特色であるアウトリーチ活動に、大きな制限が課せられることとなった。具体的には、研究期間の延長を含めて2019~2022年度において高校を訪問しての対面授業実施が困難となった。これに伴い、授業前後でのデータ収集が実現不可能となった(2023年度にパイロットスタディを部分的に再開)。また、新型コロナ禍中、および直後の生徒の精神的状態を、平時におけるものとは見なしがたいという懸念もあった。

そこで、研究代表者の専門である精神医学の観点から、近年注目を集める概念やトピックの精査を行い、本研究のフォーカスであるセルフモニタリングや援助希求を促進しうる要素や、学校精神保健に援用し得る要素について研究を深めることとした。具体的には、パーソナル・リカバリーやヤングケアラーという新奇的な論点が見出され、これらの学校精神保健やこころの健康教育への援用可能性について論じることとなった。加えて、本研究の目的として、研究代表者が継続的に関わってきた東京ティーンコホートにおいて、診断閾値下の精神的不調や、セルフモニタリング/援助希求行動に関する疫学的な新知見を得て、学術的成果を得ることもミッションとした。

### 3. 研究の方法

本研究は当初2020年度までの4カ年を計画していたが、前章に述べたとおり研究期間中に新型コロナ禍があり、研究期間を2023年度まで延長した。コロナ禍が実質的に収束した2023年度に、研究開始時の計画を部分的に再開できたものの、前述の研究目的変更に伴い、研究の方法も変更を迫られた。そこで、本章の前半では研究申請時の計画についてまとめ、後半では目的変更後における方法について述べる。

**研究開始時の計画・方法** 研究期間の前半に文献的精査を行いながら「こころの健康教育プログラム」を作成する。研究期間の中盤~後半では、実際に教育プログラムを実施し、効果実証のためのデータ収集・解析を行い、学術発表を行う計画とした。教育プログラム・効果実証の実施場所は、精神科医派遣・精神保健相談事業により既に研究代表者との連携がとれている東京都内の高校(目標学校数は6校、総生徒数は対照群を含めN=1,000)を想定した。

**教育プログラムの作成** 研究代表者の金田を責任者として、「高校学校保健体育副読本編集委員会」を結成した(構成員は下記リンクのPDFより確認可能 <https://supportteen.jp/teacher/>)。委員会は精神科医・精神保健福祉士・高校教諭(養護教諭)・教育学者・養育者代表と、他職種からなる多様な構成とした。企画・構成を報告者が担当し、複数回の合議を経て、高校保健体育副読本となる冊子「うつむいているあの子のことが、この頃すこし気になる」を作成した(内容については、4.研究成果で詳説する)。なお、この副読本の作成にあたっては、文部科学省課題解決型高度医療人材育成プログラム「職域・地域架橋型一価値に基づく支援者育成(代表:笠井清登)」と共同した。

**教育プログラムを用いた授業の実施** 2018年度に2回、前節に述べた副読本を用いた予備的授業を実施した。その上で、保健体育教諭・養護教諭等からのフィードバックを得た。上記委員会において再検討を行い、副読本を最終版として発表した(2019年3月)。2019~2022年度は、学校での対面授業の実施が行えなかった。2023年度に、都立高校をはじめとする協力校を経て、部分的に授業を再開した。授業前後および対照群に対する効果実施アンケートは実現できず、予備的なアンケートに留まった。

**研究目的変更後の計画・方法** 研究目的の変更を受けて、以下の3点を具体的な研究方法とした。①東京ティーンコホートの疫学データを活用し、精神的不調やレジリエンス、セルフモニタリングや援助希求行動についての疫学研究を推進する。②近年、精神科領域で注目されているパーソナル・リカバリーについて理解を

精緻化する。また、学校教育への普及の可能性を探る。③学校保健をとりまく新たな社会的課題について調査を行う（具体的にはヤングケアラー）。

#### 4. 研究成果

**研究発表** 本研究のフォーカスである学校精神保健や、教育プログラム作成に関する和文論文を執筆した。また、大規模疫学データを用いた思春期の精神保健にまつわる英語論文を複数発表した。ヤングケアラーの実態把握に向けた基礎的検討を報告した。

学校精神保健については、後述する教育プログラム作成の理論的背景や経緯、これを用いた学校におけるアウトリーチ活動の実際について報告した。合わせて、AYA 期の精神的健康の意義、および本邦の精神保健教育の現状についても概説した（金田ら、*精神医学*, 2022）。また、精神医学の分野で注目を集めてきたパーソナル・リカバリー概念を、AYA 期への精神科医療という観点から整理した（金田、*こころの科学*, 2020）。これをさらに発展させ、パーソナル・リカバリー指向型の治療を、いかに学校精神保健に援用できるかの可能性についての論考を、当事者性・本人の価値観という視点からまとめ、雑誌及び成書で発表した（金田、*医学のあゆみ*, 2023. 金田、*統合失調症*（中山書店）, 2020）。

思春期の精神的健康に関する大規模な前向き縦断コホートである東京ティーンコホートのデータを用いて、思春期の発達疫学の観点から AYA 期の若者の精神的不調に関連する諸要因について検討した。研究代表者が筆頭著者の報告（Kanata et al, *PCN reports*, 2024）においては、母子手帳に記録された発達遅延傾向が、思春期における夜尿頻度のリスクを高めることを明らかにした。また、東京ティーンコホートの第4期調査は、新型コロナ禍による緊急事態宣言を跨いだデータ取得となった。このことから、新型コロナ禍という社会的要因の前後で、高校生の精神症様体験が、特に男子で増加したことを報告した（DeVylder et al, *J child psychol psychiat*, 2023）。AYA 期の援助希求行動にまつわる生物・心理・社会的諸要因を包括的に検証した研究（Ando et al, *J Affect Disord*, 2018）、AYA 期の精神症様体験と自傷行為の正の関連を個人内分析（Within-person analysis）の手法を用いて明らかにした研究（Stanyon et al, *Schizophr Bull*, 2023）を発表した。インターネットの不適切な使用と ADHD 傾向の正の関連（Morita et al, *Eur Child Adolesc Psychiat*, 2022）、小学生からの SNS 使用とやせ願望の正の関連（Sugimoto et al, *Int J Eating Disord*, 2020）など、AYA 期の若者を取り巻く現代特有の社会要因と精神的不調の関係についても報告した。向社会的行動を家族から褒められることが、抑うつリスクを低減するという、こころの健康への保護的因子の存在についても報告した（Nagaoka et al, *Front Psychiatry*, 2022）。

こころの健康の全般的な不調に関わり、また不調の覚知（セルフモニタリング）や援助希求行動を妨げうる属性として、2010 年代の後半からヤングケアラーが着目されてきた（厚生労働省. 特設ページ：子どもが子どもでいられる街に <https://www.mhlw.go.jp/young-carer/>）。本邦における正確な実態把握の基盤を確立すべく、英国の BBC/ University of Nottingham Young Carers Survey Questionnaire の日本語版翻訳（YCS-J）を作成した。首都圏に在住する AYA 期の高校生において、ヤングケアラーの存在率は 7.4% と推定され、欧米諸国や標準化されていない方法を用いた本邦の先行調査結果と同程度であった。（Kanehara et al, *PCN Reports*, 2022）。

**教育プログラムの作成** 3.研究の方法で記したとおり、高校保健体育副読本「うつむいているあの子のことが、この頃すこし気になる」（以下、副読本）を作成した。この副読本は 2022 年度新学習指導要領（保健体育）に準拠しており、保健体育の授業内で実際に用いることができるよう設計された。

内容面では、本研究のフォーカスであるセルフケア・援助希求を中心に、対象を精神疾患に限定せず、広く「こころの健康／不調」について扱った。すなわち、なかなか寝付けない、些細なことでイライラする、SNS での返信が遅くなるなど、高校生が実体験しやすい疾患非特異的な不調を盛り込んだ。また、こころの健康の保護的要因であり、不調からの回復にも有効とされるピア・サポートについても盛り込んだ。ピア・サポートとは「同じ悩みを抱える人たち（＝ピア）同士で、互いに支え合う活動」を指す。疫学的観点からも、AYA 期の若者同士のピア関係は、健康の決定要因として大きなウェイトを占める（Kleinert & Horton, *Lancet*, 2016）。さらに、高校生のなかに一定数が含まれるヤングケアラーについても盛り込み、周知と啓発を計った。形式面では、AYA 期の若者がこころの健康について「自分ごと」として学びやすいようにために、マンガ形式の体裁をとった。

授業教材はすべて公開し、学校からの希望に応じて可能な限り冊子を郵送した。本研究資金に加えてクラ

ウドファンディングを活用し、冊子体を全国で1万部ほど配布できた。さらに、同内容のPDFファイルはweb上で閲覧およびダウンロード可能とした(金田ら, *精神医学*, 2022)。配布サーバーには、共同研究機関である東京大学大学院医学系研究科・精神医学分野のサイトを使用させていただいた(サポティーン <https://supporteen.jp/teacher/>)。

情報通信技術教育(ICT教育)の潮流に合わせ、教育プログラムのデジタル化・web配布も行った。現在は教室の多くにプロジェクターが設置され、スライドや動画を用いた授業も一般的である。そこで、副読本をPowerPointファイルで編集し直したスライド教材も作成した。スライド教材では、副読本の内容に加えて、生徒が抱えやすい悩みや、陥りやすい不調を説明する動画を複数パターン新規作成し、クラスの実情に応じて選択できるようにした。各学校の保健体育教諭が授業実施可能なように、指導者用解説も作成した(これらも前掲サイト「サポティーン」よりダウンロード可能)。

本教材を用いた高校生向けのパイロット版授業を、計10コマ程実施した(主に新型コロナ禍を挟んでの2018年度、2023年度)。この際、授業前後での質問紙調査も行い効果実証を検討する予定であったが、新型コロナウイルスの影響下において学校側の協力が困難となり、部分的な事後データ収集( $n=300$ )に留まった。

**成果の社会への還元** 学校精神保健へのアウトリーチ活動として、研究期間を通じて、都立高校の精神科専門相談医としての活動を継続した。精神医学的見地からの教諭への助言や、生徒との個別面談を通じて、精神的不調・希死念慮が発見され、精神科受療につながったケースが複数例(年平均2~3例)あった。高校教諭向けの研修会(計20回程度)では、本研究のテーマであるAYA期のメンタルヘルスに加えて、発達障害・虐待・摂食障害などを、学校側のニーズに合わせて幅広く扱った。本研究で作成した教育プログラムとは異なるが、全校生徒向けの精神保健講演会(3回)を実施し、スマートフォン依存など現代的なテーマを扱った。

さらに、高校教諭用の解説を執筆した。2022年度より施行された高等学校の新学習指導要領では、「精神疾患の予防と回復」という項が設けられ、およそ40年ぶりに精神疾患についての教育が復活した。これを受けて、AYA期に生じやすい精神疾患の特徴、AYA期における脳と心の発達、自己実現について、教授用の参考資料である「教授用参考資料」「指導ノート」に寄稿した。(共に大修館)。

**他プロダクト** ヤングケアラーの概念や、手近な相談先を簡潔にまとめた啓発リーフレット「家族の世話をしている10代の君に」を作成した。ヤングケアラーの問題が、特に当事者であるAYA期の若者たちに知られていない現実を受けての活動である。

AYA期の若者たちの精神的不調の際の受療促進、またパーソナル・リカバリー指向型の診療を支援するためのスマートフォン・アプリケーション「診察サプリ」を作成した(iOS/Androidストアで無料ダウンロード可能)。本アプリケーションの作成に当たっては、筆者らが作成に関わり、臨床現場で用いられていた診療支援ツールである「質問促進パンフレット」「リカバリーノート」を活用した(熊倉ら, *精神医学*, 2020)。

## 成果のまとめ

以上の成果を総合して、以下の様に自己評価する。本研究は、学校精神保健の増進を目的とし、セルフモニタリングや援助希求という鍵概念を中心に据えた。文献的精査と各専門家の知見を総合し、教育プログラム教材を作成した。教材は無償で公開し、また実際に高校での授業経験を蓄積した。一方で、新型コロナ禍により、本来計画していた教育プログラムの効果検証に至らなかった点は本研究の限界である。

前段のごとく新型コロナ禍により研究目的・方法の変更を余儀なくされたが、これを受けてパーソナル・リカバリー、ピア・サポート、ヤングケアラーなど精神医学から学校精神保健に援用し得る概念を見出した。以上のプロセスについては、つど論文化して公開した。これと並行して、地域代表住民の大規模疫学データを用いて、思春期の発達疫学の観点からAYA期の若者の精神的不調に関連する諸要因を明らかにした。アウトリーチ実践として、精神科相談医の立場から、精神的不調の発見や受療実現に貢献し、また研修会や講演を通じて学校精神保健の増進に寄与することもできた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Kanata Sho, Ando Shuntaro, Yamasaki Syudo, Fujikawa Shinya, Morimoto Yuko, Kiyono Tomoki, Morita Masaya, Hiraiwa Hasegawa Mariko, Nishida Atsushi, Kasai Kiyoto	4. 巻 3
2. 論文標題 Nocturnal enuresis in early adolescence and neurodevelopmental delay in infancy: A population based study	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports	6. 最初と最後の頁 e207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/pcn5.207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 DeVylder Jordan, Yamaguchi Satoshi, Hosozawa Mariko, Yamasaki Syudo, Ando Shuntaro, Miyashita Mitsuhiro, Endo Kaori, Stanyon Daniel, Usami Satoshi, Kanata Sho, Tanaka Riki, Minami Rin, Hiraiwa Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto, Nishida Atsushi	4. 巻 65
2. 論文標題 Adolescent psychotic experiences before and during the <sc>COVID</sc> 19 pandemic: a prospective cohort study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Child Psychology and Psychiatry	6. 最初と最後の頁 776 ~ 784
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jcpp.13907	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagaoka Daiki, Tomoshige Nanami, Ando Shuntaro, Morita Masaya, Kiyono Tomoki, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Endo Kaori, Yamasaki Syudo, Fukuda Masato, Nishida Atsushi, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto	4. 巻 13
2. 論文標題 Being Praised for Prosocial Behaviors Longitudinally Reduces Depressive Symptoms in Early Adolescents: A Population-Based Cohort Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 865907
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2022.865907	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kanehara Akiko, Morishima Ryo, ..., Kanata Sho, Okada Naohiro, Yamasaki Syudo, Nishida Atsushi, Ando Shuntaro, Koike Shinsuke, Shibuya Tomoko, Joseph Stephen, Kasai Kiyoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Young carers in Japan: Reliability and validity testing of the BBC/University of Nottingham young carers survey questionnaire and prevalence estimation in 5000 adolescents	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports	6. 最初と最後の頁 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/pcn5.46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Stanyon Daniel, DeVlyder Jordan, Yamasaki Syudo, Yamaguchi Satoshi, Ando Shuntaro, Usami Satoshi, Endo Kaori, Miyashita Mitsuhiro, Kanata Sho, Morimoto Yuko, Hosozawa Mariko, Baba Kaori, Nakajima Naomi, Niimura Junko, Nakanishi Miharuru, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto, Nishida Atsushi	4. 巻 49
2. 論文標題 Auditory Hallucinations and Self-Injurious Behavior in General Population Adolescents: Modeling Within-Person Effects in the Tokyo Teen Cohort	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Schizophrenia Bulletin	6. 最初と最後の頁 329 ~ 338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/schbul/sbac155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tanaka Riki, Ando Shuntaro, Kiyono Tomoki, Minami Rin, Endo Kaori, Miyashita Mitsuhiro, Yamasaki Syudo, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Nishida Atsushi, Kasai Kiyoto	4. 巻 -
2. 論文標題 The longitudinal relationship between dissociative symptoms and self-harm in adolescents: a population-based cohort study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 European Child & Adolescent Psychiatry	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00787-023-02183-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hosozawa Mariko, Yamasaki Syudo, Ando Shuntaro, Endo Kaori, Morimoto Yuko, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Cable Noriko, Iso Hiroyasu, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto, Nishida Atsushi	4. 巻 1
2. 論文標題 Lower help-seeking intentions mediate subsequent depressive symptoms among adolescents with high autistic traits: a population-based cohort study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 European Child & Adolescent Psychiatry	6. 最初と最後の頁 web
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00787-021-01895-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Morita Masaya, Ando Shuntaro, Kiyono Tomoki, Morishima Ryo, Yagi Tomoko, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Yamasaki Syudo, Nishida Atsushi, Kasai Kiyoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Bidirectional relationship of problematic Internet use with hyperactivity/inattention and depressive symptoms in adolescents: a population-based cohort study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 European Child & Adolescent Psychiatry	6. 最初と最後の頁 web
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00787-021-01808-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yagi Tomoko, Ando Shuntaro, Usami Satoshi, Yamasaki Syudo, Morita Masaya, Kiyono Tomoki, Hayashi Noriyuki, Endo Kaori, Iijima Yudai, Morimoto Yuko, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Koike Shinsuke, Kano Yukiko, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Nishida Atsushi, Kasai Kiyoto	4. 巻 12
2. 論文標題 Longitudinal Bidirectional Relationships Between Maternal Depressive/Anxious Symptoms and Children's Tic Frequency in Early Adolescence	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 767571
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2021.767571	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Stanyon Daniel, Yamasaki Syudo, Ando Shuntaro, Endo Kaori, Nakanishi Miharuru, Kiyono Tomoki, Hosozawa Mariko, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Morimoto Yuko, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto, Nishida Atsushi	4. 巻 239
2. 論文標題 The role of bullying victimization in the pathway between autistic traits and psychotic experiences in adolescence: Data from the Tokyo Teen Cohort study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Schizophrenia Research	6. 最初と最後の頁 111 ~ 115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.schres.2021.11.015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Endo Kaori, Yamasaki Syudo, Nakanishi Miharuru, DeVlyder Jordan, Usami Satoshi, Morimoto Yuko, Stanyon Daniel, Suzuki Kazuhiro, Miyashita Mitsuhiro, Arai Makoto, Fujikawa Shinya, Kanata Sho, Ando Shuntaro, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto, Nishida Atsushi	4. 巻 239
2. 論文標題 Psychotic experiences predict subsequent loneliness among adolescents: A population-based birth cohort study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Schizophrenia Research	6. 最初と最後の頁 123 ~ 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.schres.2021.11.031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sugimoto Noriko, Nishida Atsushi, Ando Shuntaro, Usami Satoshi, Toriyama Rie, Morimoto Yuko, Koike Shinsuke, Yamasaki Syudo, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Furukawa Toshiaki A., Sasaki Tsukasa, Hiraiwa Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto	4. 巻 53
2. 論文標題 Use of social networking sites and desire for slimness among 10 year old girls and boys: A population based birth cohort study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Eating Disorders	6. 最初と最後の頁 288 ~ 295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/eat.23202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Ando Shuntaro, Nishida Atsushi, Usami Satoshi, Koike Shinsuke, Yamasaki Syudo, Kanata Sho, Fujikawa Shinya, Furukawa Toshiaki A, Fukuda Masato, Sawyer Susan M, Hiraiwa-Hasegawa Mariko, Kasai Kiyoto	4. 巻 238
2. 論文標題 Help-seeking intention for depression in early adolescents: Associated factors and sex differences	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders	6. 最初と最後の頁 359 ~ 365
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jad.2018.05.077	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田 渉	4. 巻 6
2. 論文標題 ライフステージに注目した統合失調症への心理社会的支援 AYA期を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 601-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤俊太郎, 西田淳志, 山崎修道, 遠藤香織, 小池進介, 金田渉, 藤川慎也, 宮下光弘, 岡田直大, 長谷川真理子, 笠井清登	4. 巻 4
2. 論文標題 東京ティーンコホート	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 553-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田 渉, 森島遼, 岡田直大	4. 巻 9
2. 論文標題 こころの健康出前授業と授業教材の作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 1215-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤俊太郎, 西田淳志, 山崎修道, 金田渉, 藤川慎也, 森本裕子, 遠藤香織, 清野知樹, 小池進介, 岡田直大, 杉山宙, 金生由紀子, 長谷川眞理子, 笠井清登	4. 巻 4
2. 論文標題 思春期のメンタルヘルス疫学 東京ティーンコホートについて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 479-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊倉陽介, 金原明子, 金田渉, 笠井清登.	4. 巻 62(10)
2. 論文標題 共同意思決定支援ツール「質問促進パンフレット」と「診察サブリ」の作成の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 1359-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田渉	4. 巻 210
2. 論文標題 統合失調症の暮らしに寄り添う 当事者の暮らしに寄り添う治療と支援 当事者ととも治療をつくり、回復をめざすための工夫	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 55-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田渉, 小池進介	4. 巻 261(10)
2. 論文標題 生活・保健・医療・福祉・教育の統合学校精神保健・予防	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 1001-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金田渉、佐藤研一、稲垣晃子、渡邊由香子、管心、安西信雄、池淵恵美
2. 発表標題 精神科デイケアを利用した統合失調症患者のリハビリに関する縦断的観察研究
3. 学会等名 第118回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sho Kanata
2. 発表標題 School-Based Mental Health
3. 学会等名 International Symposium on Adolescent Health and Personalized Value (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田渉、里村嘉弘、市橋香代、小池進介、笠井清登
2. 発表標題 「都立高校専門医派遣事業」における精神科医派遣の実践と今後の課題
3. 学会等名 第113回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金田渉、金原明子、熊倉陽介、笠井清登
2. 発表標題 公立中学校における「こころの健康出前授業」の取り組み
3. 学会等名 第110回東京精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金田渉、藤川慎也、鳥山理恵、遠藤香織、森本裕子、小池進介、山崎修道、安藤俊太郎、西田淳志、長谷川真理子、笠井清登
2. 発表標題 乳幼児期の発達指標と10歳時夜尿との関連 地域住民代表調査 Tokyo Early Adolescent Survey : T-EASより
3. 学会等名 新学術領域主体価値 平成29年度国際思春期ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金田渉, 熊倉陽介, 金原明子, 笠井清登, 村井俊哉, 福田正人
2. 発表標題 共同創造による「研究」の再構築に向けた対話.
3. 学会等名 第15回日本統合失調症学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kanata S, Miyo A, Kaneda T, Fujieda Y, Inagaki A, Sato K, Hatsuse N, Watanabe Y, Motomu S, Nobuo A, Ikebuchi E
2. 発表標題 Personal recovery and associated factors among psychiatric day treatment center users with a diagnosis of schizophrenia spectrum disorders in Japan.
3. 学会等名 7th European Conference on Schizophr Research
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kanata S, Sato K, Inagaki A, Miyo A, Kaneda T, Fujieda Y, Watanabe Y, Suga M, Anzai N, Ikebuchi E
2. 発表標題 Clinical recovery and social functioning among day-care users with a diagnosis of schizophrenia; a retrospective chart study by medical records.
3. 学会等名 The 7th BESETO International Psychiatry Conference
4. 発表年 2018年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 松下正明、神庭重信、笠井清登	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中山書店	5. 総ページ数 7
3. 書名 統合失調症（うち1章：「学校精神保健」）	

1. 著者名 金田渉、荒木剛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 8
3. 書名 17章「自己実現」 in 現代高等保健体育教授用参考資料	

1. 著者名 金田渉、大島紀人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 新高等保健体育 指導ノート（うち1章：「1-16 精神疾患の特徴」）	

1. 著者名 金田渉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 新高等保健体育 教授用参考資料（うち1章：「思春期における脳と心の発達と自己実現」）	

## 〔産業財産権〕

〔その他〕

ヤングケアラー啓発リーフレット「家族の世話をしている10代の君に」。東京大学・学校関係者合同ヤングケアラーリーフレット作成委員会。2023年。  
<https://kokoro-zukan.com/archives/658>  
スマートフォン・アプリケーション「診察サブリ」。2019年。<https://co-production-training.net/materials/>  
3高校保健体育副読本「うつむいているあの子のことがこの頃すこし気になる」。高等学校保健体育副読本編集委員会。2018年 <https://co-production-training.net/materials/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 新学術領域「主体価値」国際ワークショップ 学校・思春期ポスターセッション（共催）	開催年 2017年～2017年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------